

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

日本全国の富を集めて繁栄を誇る首都東京は、江戸期の度重なる大火、その後の関東大震災、東京大空襲など無数の犠牲を払った土地の上にあります。死屍累々の果ての繁栄なのだと『東京骨灰紀行』の著者小沢信男は語る。

その大災害の一つ、1657（明暦3）年正月18日から19日にかけて、本郷丸山の本妙寺から出火したとされる火事は、北西の強風にあおられ、町家から大名屋敷や江戸（平間寺）参道の亀屋や万年屋も奈良茶飯で知尽くし、死者は一説に10万7000人、少なくとも5万～6万人という。

江戸で流行「奈良茶飯」

事が始まる。その活況のなか浅草寺東北すぐの待乳山聖天付近の店で始まつた食べ物が「奈良茶飯」だった。

奈良茶飯は、茶飯・豆腐汁・煮染・煮豆をセットにしたもので、「江戸中端々よりも金龍山の奈良茶くひにゆかんと、殊の外珍しくにぎはひし」（『事跡合考』）と評判になり、単に「奈良茶」とも呼ばれた。各地に店とも呼ばれた。各地に店が生まれ、厄除けで有名な東海道筋の川崎大師（平間寺）参道の亀屋や万年屋も奈良茶飯で知



くらわんか船で売っていた奈良茶（『絵本家賀御伽』部分）。中央の行灯に「ならぢゃ」の文字が見える

江戸での奈良茶の流行は、京や大阪へも伝わり、「四条河原のなら茶屋」もでき、井原西鶴も「若衆宿のならぢゃ、一盃八

うられた。大師詣でにはこのどちらかの店に立ち寄ったため「大師様奈良茶九は「弥一『コウむだをいはずとはやく喰はつ

り』（『世間胸算用』）、「近き比、金龍山の茶屋に一人五分づつの奈良茶御伽」という本には、その様子を「くらわんかと夜船の旅人打ちもねせで夢路の闇となら茶うる声」と記している。

（奈良民俗文化研究所代表）

|| 次回は来年1月8日

し。汁がさめらア。』北（『西鶴置土産』）などと作品にもこの流行の食べ物を描き込んでいる。江戸時代、京伏見と大坂間を運行した旅客と荷物の乗合船を三十石船といふ。この船に酒や餅など食べ物を売りつける船が茶船、俗にいう「くらわんか船」だった。この船は「奈良茶船」とも呼ばれた。1752（宝暦2）年刊行の『絵本家賀御伽』という本には、その様子を「くらわんかと夜船の旅人打ちもねせで夢路の闇となら茶うる声」と記している。